序

藤原宮跡は、戦前の日本古文化研究所の大極殿院・朝堂院の調査、戦後の奈良県教育委員会による国道165号線バイパス建設計画にともなう調査に引き続いて、奈良国立文化財研究所が調査を続けており、宮・京の状況が次第に明らかになりつつある。

奈良県教育委員会の調査によって、宮の外郭の位置と状況が明らかとなったが、岸俊男氏らは、宮と古道の関係などに注目され、左右京十二条四坊の藤原京の条坊を復原されている。この案によると、宮は京の北辺から4町南に寄ることになる。これは藤原京と平城京との大きな相違点の一つであるが、この宮北方の東西8町、南北4町の地は、宮と密接に関連する地域と考えられている。とくに、この地域内の高市郡路東条里二十四条二里三十一坪は「テンヤク」の字名をもち、このあたりに典薬寮関係の施設が想定されている。

今回、林住建株式会社により宅地開発が計画されたのは、宮北面東門推定地から北に約200m、国鉄桜井線のすぐ北側で、まさにその字「テンヤク」の北半分にあたり、藤原京条坊では、左京二条一坊東北坪と同二坊西北坪にまたがり、中央を東一坊大路が通ると推定されるところである。

昭和61年4月から7月にかけて、約2600㎡の発掘調査を行なった結果は、「テンヤク」に関する直接の資料は得られなかったが、東一坊大路及び坪内の状況が明らかとなるとともに、東一坊大路西側溝から和同開珎銀銭3枚が発見され、藤原京の調査研究に重要な知見を得ることが出来た。

この調査は、奈良県教育委員会が林住建株式会社から委託を受け、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が、県教育委員会の委嘱を受けて行なったもので、調査の実施に当り協力いただいた林住建株式会社をはじめ、関係各位に厚く御礼申し上げる次第である。

昭和62年3月

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部長

岡田英男